

不思議な縁の糸

小 淵 恵 三

昭和五十五年七月九日。東京は朝から激しい雨だった。この日、北の丸の武道館で行われた故大平総理の内閣・自民党合同葬は、カーター米大統領、華国鋒中国首相ら世界百八カ国の代表をはじめ内外の貴賓多数が出席するという、わが国有史以来の盛儀となった。この歴史的な葬儀の実行委員長を務めさせていただいた私は、身に余る光栄と緊張と、こみ上げてくる惜別の念に、万感胸に迫り筆舌に尽しがたいものがあった。

大平先生には、これまで党内派閥を異にしていたこともあって直接薫陶を受けるといふ機会に恵まれなかったが、第二次大平内閣の総理府総務長官を拝命して初めて、あの内容の濃い大平さんの醫咳に接することができた。それから亡くなるまでの八カ月間、閣僚としてお仕えできたことを、私は政治家として幸せと感じている。

いま想像えば、大平先生とは不思議な縁の糸で結ばれていたような気がしてならない。総務長官に就任して間もなく大平先生が総理府の幹部を官邸の食堂に招いてくれた。その時「総理もこれから立派な宰相として歴史上の人物になって下さい」と申し上げたのだが、そのわずか八カ月後に、本当に歴史上の人物になられてしまおうとは。今年の春の叙勲の時、叙勲者のリストを提出して「総理も今年七十歳になられたので叙勲対象者でございませう。これまで現職の総理は、いただいておりますが、この際、あなたが嚆矢となって勲章を受けられてはどうですか」と申し上げた。すると、あのはにかんだような笑みを浮かべられて「うーん」と絶句して無言の辞退をされた。ところが、これも二カ月後にはまさに勲章を授与される結果になった。大勲位菊花大綬章。

私がお仕えした第二次大平内閣は、与野党伯仲の政局を背景に、党の内外ともに苦勞の多い政権であった。そうしたなかで大平総理は、五月の日米首脳会談に続いて、チトー・ユーゴ大統領の葬儀に出席、帰国後は解散・ダブル選挙と、息つく間もないほどの激務の連続だった。想えば過酷な政務に、心身ともに疲勞の極にあったのだと胸が痛んでならない。六月の選挙で、中国地方へ同志の応援に行く予定になっていたが、六月十一日になって、急に大平先生の選挙事務所に寄って、私を登用していただいた総理の支持者にせめてお礼だけでも申し上げたいと思い日程を変更した。ところが翌十二日未明、夢にも考えなかった総理の急逝である。しかし私は、変更したまま十三日の昼すぎ観音寺市に着いた。それが奇しくも後継者の森田一氏の事務所開きの時刻だった。そして今、森田代議士と協力して、私も同行させていただいた五十四年五月訪米時、大平総理が大変ご関心を示されたYFU（青年相互理解協会）事業の推進に努力させていただいている。

私は昭和三十八年の総選挙に初出馬する年、世界一周無銭旅行をしたことがある。かつて私は早大の合気道部にいたので、各国の日本武道館を訪ねて回ったのだが、私の行く先々で、大平先生のご長男の正樹君が同じように慶大合気道部のOBとして武者修行に回っていることを聞かされた。その正樹君は、不幸にして帰国後病をえて亡くなられた。私はその直前、東大病院にお見舞いに行つたが、もう面会謝絶で会うことができなかった。

大平さんは正樹君との死別に際して、「凡夫である私は生きる希望と情熱を失いかけた」と書いておられる。いま天上で、最愛のご長男とどんなお話をされているだろうか。

その日、合同葬の開式の辞を述べたあと、私は大来外相とともに武道館の玄関で、退場される外国貴賓をお見送りした。雨はすっかり小降りになっていたが、外には献花を待つ一般会葬者の長い傘の列が、どこまでも長く続いていた。

（衆議院議員・第二次大平内閣総理府総務長官）